「月の光」

徳島県立池田高等学校　二年　福田　夏鈴

月って情けない。自分で輝くことができないから。

私は月のようだ、と以前から思っていた。誰かがいないと、働けない。人間関係を構築する中で必ず、誰か活発で、自己主張が激しい人を一人、近くに置く。

私を月とするなら、あの子は太陽だ。高校で出会った、今までに見たことがないほど活発なあの子。ひょんなことで行動を共にするようになってから、仲良くなった。今では、プライベートから学校活動まで、ほとんどのことを共にしている。

ある日のことであった。珍しくあの子が学校を休んだ。取り組んでいる活動について話し合いを行う予定の日だったので、私たちのみで話をすることにした。いざ話そう、となったのは良いものの、話題が脱線したり、意見が出なかったりと、うまくいかないことばかりであった。あれやこれや、とするうちに時間が来てしまった。何もまとまらないまま、話し合いとは名ばかりの雑談が終わった。

家に帰り、布団に入って一人、本日の反省会をする。どうすれば良かったのか、いつもはどんな感じだったか。ああ、そういえば、いつも率先して場を回し、話を進めていたのはあの子だった。仮にもリーダーである私は、そういった行動ができなければならないのに。今までできている、と思っていたことは、あの子がいるからできていることだったのだとひしひしと感じた。感情の渦に飲み込まれ、ずぶずぶと思考の海に沈んだ。

海から上がった頃には、朝になっていた。体が重い。まるで、濡れた服を着ているかのようだ。かかっている重みの、その正体を、私は知っている。「あの子ならできたのに」そういう劣等感だ。その日はできるだけ普通に振る舞った。なんだか疲れてしまったので、少し早めの汽車で帰った。帰りの道中、また思考の海を漂った。

次回の話し合いが怖い。一つは自分はできていた、という自信がこそぎ取られていて、まともに動けるかどうか分からない怖さ。もう一つは、あの子が参加した話し合いが円滑に進んだら、本当に私ができていなかった、という現実を再び叩きつけられるようになることへの怖さだ。指先の体温が少しずつ下がるのを感じながら、帰路についた。

恐怖を取り払うことができないまま、話し合いの日を迎えてしまった。いつも通りの朗らかな雰囲気で始まり、案の定、円滑に話が進み、終わった。その間、私も案の定、いつもより動けなかった。動かなかった。月は雲に隠れた。

それからというもの、私は、話し合い中にあまりでしゃばらないように心がけて動いた。そうしてもちゃんと話は進むし、まとまりもする。それの繰り返しが、さく、さくと自信を削っていく。自分はいなくても大丈夫なのではないか、と思い始めるには、十分な事実だった。

転機が訪れたのは、活動の成果の発表が近づいた頃だった。いつも通り、あの子はぽんぽんと話を進めていく。発表資料の作成、原稿作りなど、役の振り分けをしているようだ。いつもなら、原稿を担当するのは私だ。でも、今回ばかりはこなせる自信がなかった。だから、任される気もしなかったし、他の人に譲るつもりだった。

話し合いは無事終わり、私は原稿担当になった。どうしてなったのか。それは、話し合い中にかけられた言葉がキーだった。

役割を請け負いあぐねていたとき、あの子が

「原稿担当任せていい？文章作るん上手いし！」

と軽やかに言った。思ってもみなかった言葉に驚いた。それと同時に、じわっと胸が温かくなるのを感じた。固まった劣等感が溶けていく。私にも、任せてもらえることがあったなんて。認めてもらえるなんて。単純すぎるかもしれない。でも今は、頼りにしてくれたことがただ嬉しい。月を隠した雲は晴れた。

少し余裕ができた私は、改めて周りを見てみた。気付けていなかったが、みんな、それぞれの「得意」を生かして活動している。メモを取るのが得意な人やリサーチや書類管理が得意な人。まるで太陽や月、星の数々に囲まれているようだった。

私はやはり、月のままだ。でも今は、そのままでいいと思える。太陽たちの光を受けて柔らかく反射し、人々の心に届くようにする。そんな役割も必要だと気付けたから。

私は、私にできることを精一杯やっていく。月なりの輝き方で。